

## 【もう一つの初期ヤマト王権の成立プロセスに関して】

by N. Miyamoto

## ( 考察Ⅱ )

全 13 枚

1. はじめに

先に筆者は、邪馬台国は北部九州にあり、奈良盆地に根拠を置いた初期ヤマト王権と長年にわたり並立状態にあったという視点に立ち、“初期ヤマト王権の成立プロセス”（以下“[考察Ⅰ](#)”）を考察した。その結果、

- ① 西暦 130 年頃から北部九州にあった倭国が“膨出”を開始し、北部九州/山陰/畿内に勢力を伸ばした後、
- ② “北部九州/山陰に拠る邪馬台国連合”と“畿内に東遷した瓊瓊杵系王権”の形をとって併存し、やがて
- ③ “邪馬台国連合の解体”と“瓊瓊杵系王権の拡大”によって瓊瓊杵系による初期ヤマト王権が成立した

という結論に達した。この結論において①の“倭国の膨出と分裂”は伝承資料から想定できるが、②の“その後も倭国は邪馬台国連合として形を変えながら北部九州に存在した”という主張は、残念ながらその多くが憶測を含んでいて、考古資料にも伝承資料にもそれを確実に裏付けるものは少ない。その点、邪馬台国近畿説には考古学的に支持された“近畿優勢”論の推しがある。しかし、倭国乱によって北部九州を制し、纏向を中心として邪馬台国ができたという近畿説の展開には多分に無理がある。むしろ 2 世紀後半に北部九州から畿内に進出した東遷勢力(物部/神武ほか)によって、大和盆地に拠点を置き、西日本横通しに広域化し、階層化の傾向を持つ首長連合が形成されて、その結果、考古学上の“近畿優勢”も進行したと考えるのが妥当ではないだろうか？ この場合、“[考察Ⅰ](#)”で述べたような、北部九州に残った倭国内で内乱(=倭国乱)が起きて邪馬台国ないし邪馬台国連合が形成されたという憶測に強いてこだわる必要はなくなる。例えば、

- ② 畿内に東遷した勢力が主体になって大和盆地を中心に形成された聖俗 2 重の王権が続き、やがて
- ③ 巫女王による聖的王権が自然消失し、瓊瓊杵系の俗的王権だけによる初期ヤマト王権に移行した

という仮説も成立するからである。その場合、[考察Ⅰ](#)の北部九州説は近畿説に置き替わる。以下、この仮説、すなわち“もう一つの初期ヤマト王権の成立プロセス”(→考察Ⅱ)について持論を展開してみたい。

2. 魏志・倭人伝の記述に関する考察

考察Ⅱでは東遷した瓊瓊杵系勢力などによって大和盆地に邪馬台国が形成されたという仮説を採る。そこでまず倭人伝を読み直し、記紀などの伝承資料や遺跡などの考古資料と照合しながら、ごく一般的な視点から魏志・倭人伝の記述の背景などを考察してみる。

その場合、邪馬台国(連合)の存立期間は、卑弥呼が共立されてから台与が女王でなくなるまでと考えられるので、粗々見積もって AD200 年～280 年(約 80 年ぐらい)と推測される。[考察Ⅰ](#)で議論したように、崇神天皇の活躍期を AD280～310 年頃とすれば、邪馬台国の存立期間は、崇神以前の、おおむね記紀に記される所の

欠史八代（綏靖-安寧-懿徳-孝昭-孝安-孝靈-孝元-開化）

に引き当てられるはずである。以下、この推測を念頭において、倭人伝の後半部の関連記述を下記のように区分けして考察してみたい(なお⑦の着色部は記述内容の要約を表示している)。

- ① その国、本また男子を以て王となし、住まること七、八十年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、
- ② 乃ち共に一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼という。

- ③ 鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも夫婿なく、男弟あり、佐けて国を治む。
- ④ 王となりしより以来、見るある者少なく、婢千人を以て自ら侍せしむ。ただ男子一人あり、飲食を給し、辞を伝え居処に出入す。
- ⑤ 宮室・楼観・城柵、巖かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す。
- ⑥ 女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆倭種なり・……・周旋五千余里ばかりなり。
- ⑦ 景初3年(239年) 使者・難升米/牛利、帯方郡經由で洛陽に詣でる  
親魏倭王任命、布・刀劍・真珠・銅鏡などを下賜  
正始元年(240年) 帯方郡、使者を送り倭国王に詔書・印綬(印章)など渡す これに倭王返礼  
正始4年(243年) 倭王再び使者を送り生口・布・丹・弓など献ず 使者に印綬  
正始6年(245年) 郡を經由して難升米に黄幢を下賜、
- ⑧ その八年[正始8年(247年)]、太守王基官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭の載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。
- ⑨ 塞曹掾史張政等を遣わし、因って詔書・黄幢(軍旗)を齎し、難升米に拝仮せしめ、檄を為りて、これを告諭す。
- ⑩ 卑弥呼以て死す、大いに冢を作る。径百余歩、殉葬する者、奴婢百余人、
- ⑪ 更に男王を立てしも國中服せず、更に相誅殺し、当時千余人を殺す。
- ⑫ また卑弥呼の宗女壹与(→台与)年十三なるを立てて王となし、國中遂に定まる。
- ⑬ 政等、檄(→激励)を以て壹与を告諭す。壹与、倭の太夫率善中郎将・掖邪狗等二十人を遣わし、政等の還るを送らしむ。因って台(→洛陽官庁)に詣り、男女生口三十人を献上し白珠五千孔……を貢す。

① その国、本また男子を以て王となし、とどまること7,80年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、

①について。この文節はいわゆる倭国乱(倭国大乱)を記述したものと考えていい。倭国乱を議論する場合、倭国がどう見られていたかという問題がある。考察1では中国史書に云う倭国を北部九州とその周辺と見なし、倭国乱を北部九州内で起きた内乱と解釈して卑弥呼と邪馬台国が北部九州に存在したと考えた。しかし、従前の邪馬台国近畿説のように、倭国の領域が北部九州の近隣に留まらず、西日本全域に及んだとすれば、倭国乱を広域の争乱とみることもできる。その場合、倭国王も北部九州の枠外の、例えば出雲の王であった大国主に振り当てることが可能であるが、“漢倭奴国王”の延長で、大陸に接続する北部九州の王が、倭国王を自称したと見るのが妥当ではないかと思われる。

結局、倭人伝にいう男王には、AD107年に後漢に入貢した倭国王・師升が見合っている。その場合、

[AD107年+(70~80年)=AD177~187年]頃 → 倭国乱の発生

[AD177~187年+8年(≒歴年)=AD185~195年]頃 → 倭国乱の鎮静

ということになる。また後漢書では、“桓帝・靈帝の治世の間 (AD146年~189年)、倭国は大いに乱れ、互いに攻め合い、何年も主がいなかった”となっている。考察1でも、記紀に準じてAD130年~190年頃まで出雲国譲り/物部族東遷/神武東征、更には倭国乱が起きたと考えている。国譲りや神武東征については記紀の中に詳述されている。これらは何れも軍事的衝突であるから、倭人伝の①の記述は、概して記紀の記述に符合しているようだ。

② 乃ち共に一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼という。

②について。ここでは卑弥呼の出現を述べているが、論点になるのは “共に…王となす”、即ち“共立”に

よって卑弥呼が倭国王になったことである。[考察1](#)では、倭国乱を倭国の内部抗争、即ち倭国王を奉斎する玄界灘沿岸の旧勢力と筑後川流域の内陸勢力の争いと捉え、結果的に新興の内陸勢力が優位に立って、その中心にいた邪馬台国の女王・卑弥呼が、北部九州から山陰に及ぶ首長連合によって共立される形で最終的に倭国乱が収束したと考えている。

しかし解釈によっては、この倭人伝の記述は、“乱の結末がつかないまま、乱を終わらせるために、みんなで乱には係わりのない中立者を選んで倭国王につけた”とも読み取れる。記紀では、神武天皇が橿原で王朝を開いた後、王位継承の争いがあり事歴不明の天皇が数代続いている。そのため畿内における瓊瓊杵系王権の初期段階において、王権内の骨肉の争いによる“歴年”の混乱が起きたのではないかという憶測も可である。もしそうであれば、長引く混乱を収束するため、東遷した王族の中から中立的で血筋のよい女性を選んで、神託を受信させ王統を維持したという憶測も成立するのではないかと思う。

### ③ 鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも夫婿なく、男弟あり、佐けて国を治む。

③について。卑弥呼の外貌を紹介している。“鬼道に事え”については、一般に云われているように、シャーマニズム的な巫術行為を指していると思う。日本書紀には倭トト日百襲姫が神懸かりして

- ・自分(大物主)を敬い祀れば疫病の流行は自然と遠のくという予告
- ・そのわらべ歌は武埴安彦の謀反を暗示しているという予告

を行ったことが記されているが、何れも単なる神祀りとは異なる、憑依によるものと思われる。当時、百襲姫の行なったような予告行為が、初期ヤマト王権の公的な判断として用いられていたようだ。

また、“年已に長大…”の記述から卑弥呼が一生未婚で長生きしたことがわかる。これは百襲姫が本来、独身の巫女であり、孝霊-孝安-開化-崇神の4世代を生きたことと符合している。また、卑弥呼は政治的な実務には男弟(→親族の男性)に任せ、神事に専念していたようで、これは、百襲姫のような高級巫女が政治の場と係わりなく託宣を行っていたという憶測に符合している。倭人伝の④の記述は、邪馬台国近畿説で従来から主張されているように、日本書紀に記された倭トト日百襲姫の様態に類似する所が多い。ただ個人的には、両者の類似は単にパターンの類似としてとらえるべきだと思う。⑩の項でもふれるが、百襲姫を卑弥呼とするには無理がある。

更に“男弟あり、佐けて国を治む”は非常に重要で、邪馬台国の統治システムがいわゆる“聖俗2重首長制”であったことを明確に示している。この場合“卑弥呼は“聖王”、男弟は“俗王”であり、聖王が俗王の上位にあったと考えられる。古代においては多くの場合、神事と人事は不可分であった。記紀によれば、神武天皇は軍事を差配するとともに、神事を主宰した聖俗一体の王であったと思う。古代の皇統譜では“天照大神-素戔鳴命”と“神功皇后-応神天皇”の場合を除いて、聖俗2重(聖俗分離)の王権はレアで、聖俗一体の王権が常態であったと見られる。然るに聖俗一体の王権であった神武期の後に続く欠史八代では、むしろ聖俗2重の王権が常態化していたと見ていいと思う。その場合、聖王である卑弥呼や台与は対外的には倭国王と見なされ、俗王である天皇(おおきみ)は、軍事以外の事歴を割愛され、その墳墓が巨大化することはなかった。

なお、“男弟”は、年已に長大な卑弥呼には？ 卑弥呼との関係は倭人伝の著者の単なる憶測と思われる。

### ④ 王となりしより以来、見るある者少なく、婢千人を以て自ら侍せしむ。ただ男子一人あり、飲食を給し、辞を伝え居処に出入りす。

④について。卑弥呼の生活環境を述べている。自分の身边を隠して神仕えに徹している様子はわかるが、



婢千人を従えていたというのは中国流の誇張表現であって、数十人程度の正規/非正規の巫女に囲われて神事に従事していたというのが実情ではないかと思う。従前の近畿説では、**纏向の辻地区から発掘された掘立柱の建物群を卑弥呼の居住跡/祭場跡としているが**、ほかに建物の設置理由が見当たらないので妥当性があると思う。男子が出入りしていたとされるが、巫女王として、更には疑似的な神として奉仕されていたのだろう。卑弥呼が**神に近い出自(神族)であったことがうかがえる**。この倭人伝の記述は、直接、記紀の記述には繋がらないが、北部九州沿岸域に存在した神道の原初的な形態として受けとれないだろうか？

**⑤ 宮室・楼観・城柵、厳かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す。**

**⑤について**。卑弥呼の周辺環境を述べている。記紀には、百襲姫に関連してこれに類似する記述は見られない。この記述は従前の九州説の論拠の一つになっている。確かに大和の纏向遺跡には、城柵跡はもとより多重環濠などが存在した気配は未だ見られないが、仮に、卑弥呼の居住地が纏向にあったとすれば、卑弥呼は狗奴国から十分離れた安全地帯に居て警護不要になる。そもそも倭人伝にいう“城柵”や“兵による守衛”は、狗奴国の急襲に備えたものとは言い切れない。卑弥呼がそれだけ重要な貴人であったことを定型的に記述したに過ぎないのではないか……

**⑥ 女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆倭種なり……周旋五千余里ばかりなり。**

**⑥について**。文節の括りとして挿入された印象がある。もちろん記紀の記述に類似した個所はない。この記述も従前の九州説の論拠になっている。女王国の東に海があるので女王国は島の中にあり、その東に島が続いてそこにも倭人国があるので、九州と本州との位置的な関係が浮かんてくる。しかし仮に女王国(邪馬台国)が大和盆地にあっても、東に伊勢湾があり、その先に東海-関東の弥生社会が続くので、よく似た記述になるのではないだろうか？あるいは邪馬台国の西端にあった玄界灘沿岸を起点にした記述かも知れない……

**⑦ 景初3年(239年) 使者・難升米/牛利、帯方郡經由で洛陽に詣でる**

親魏倭王任命、布・刀劍・真珠・銅鏡などを下賜

正始元年(240年) 帯方郡、使者を送り倭国王に詔書・印綬(印章)など渡す これに倭王返礼

正始4年(243年) 倭王再び使者を送り生口・布・丹・弓など献ず 使者に印綬

正始6年(245年) 郡を經由して難升米に黄幢を下賜、

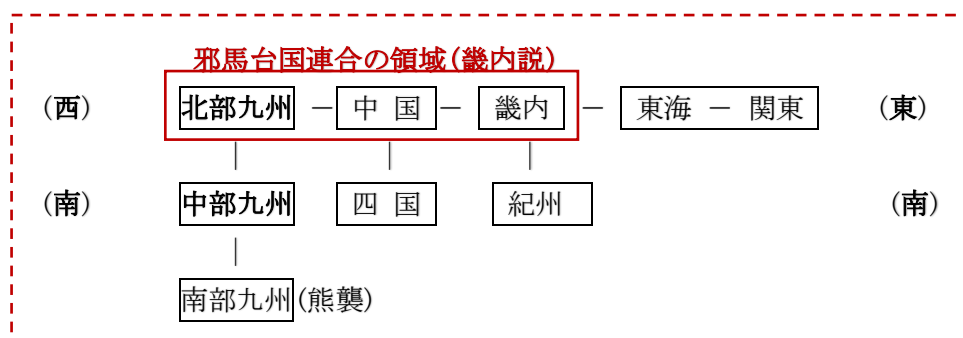
**⑦について**。“女王の朝貢→詔書/印綬の下賜とその答謝→女王の再朝貢→帯方郡から**黄幢**の下賜”という帯方郡と女王国の朝貢外交の詳しい経過が記述されている。記紀の欠史八代及び崇神紀にはそれら朝貢外交についてなにも記述されていないので、ヤマト王権外で起きた出来事かもしれないが、**意図的に記述が割愛された可能性**もある。この代わり崇神紀/垂仁紀には、蘇那曷叱知や都怒我阿羅斯等/天日槍の渡来が記述されている。それは、朝鮮半島南部の弁韓諸国との初期の交流を物語るもので、卑弥呼が行った朝貢外交とは異質なものと考えられる。纏向遺跡からは銅鏡を除き、3世紀の大陸との交流を思わせるものは、まだ出土していない。そのため“見えざる鉄器”と同様に従前の近畿説の弱みになっているが、纏向遺跡の発掘の進展によってはその状況は変化するかも知れない。卑弥呼が受領した銅鏡100枚については、近畿一円から出土する多数の銅鏡に紛れ込んで伝世した可能性が考えられる。

**⑧ その八年[正始8年(247年)]、太守王キ官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭の載斯鳥越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。**

**⑧について**。邪馬台国と狗奴国の抗争を帯方郡が把握していたことが記述されている。記紀にはこれに該当する記事は見当たらない。[考察Ⅰ](#)では狗奴国を[熊襲≡肥人]のクニとして議論したが、記紀では熊襲がヤマト

王権の敵対者として登場するのは景行紀以降である。倭人伝では邪馬台国や狗奴国の方位を“南”としているが、従前の近畿説では、これは“東”の誤りで、狗奴国を東海地方や関東地方に存在した有力国としている。

しかし邪馬台国の方位表示のみが誤りで、狗奴国の方位表示の方は間違っていないとすれば、下図のように邪馬台国連合の南側すなわち中部九州、四国あるいは紀州方面に狗奴国があったことになる。[考察Ⅰ](#)では通説通り、“狗古智彦”を菊池彦と解し、北部九州に隣接する中部九州の熊本地方を狗奴国とした。四国や紀州にも可能性はあるが、記紀に記述される4世紀の熊襲征伐を考えれば、中部九州説の方が妥当ではないかと思う。中部九州の方位は、邪馬台国のあった畿内からから見ればむしろ西ではあるが、“邪馬台国連合”という見地からは南寄りに位置している。邪馬台国 vs 狗奴国の状況は、狗奴国を更に南方にあった熊襲に置き換えれば、後世の景行紀のそれによく似ていたと思われる。その場合、狗奴国の位置は、半島との交易の窓口であった北部九州の沿岸域に近いと、**帯方郡との朝貢関係を維持する上で、狗奴国の北上は重大事**であった。恐らくかなり切実に武力的な救援を帯方郡に訴えたのではないかと思う。



⑨ 塞曹掾張政等を遣わし、因って詔書・黄幢(軍旗)を齎し、難升米に拝仮せしめ、檄を為りて、これを告諭す。

⑨について。帯方郡が邪馬台国の訴えに対応した様子が記されている。むろんこの状況は記紀には記されていない。軍監として張政を派遣し軍旗を与え激励している。おそらく帯方郡としては、魏と呉の関係や半島の不安定から軍を動かすことは難しく、やむなく柵封体制下の叱咤勉励に徹したようである。張政が大和盆地の邪馬台国まで来たかどうかはわからない。個人的には、伊都国辺りまで来て難升米に軍旗を渡し、督戦的な行為をしたのではないかと思う。以後、張政は帯方郡と北部九州を往来し筑後川流域で起きた狗奴国との抗争を監視したようで、卑弥呼のいる大和・纏向にはとうとう来ていないと思う。なお、難升米は帯方郡に近い北部九州に常駐し、後世の大宰帥的な役割を持ち、邪馬台国の出先機関の“一大率”を束ねる立場にあったのではないだろうか？

⑩ 卑弥呼以て死す、大いに冢を作る。径百数歩、殉葬する者、奴婢百余人、

⑩について。卑弥呼の死を記述するが、旧来から議論百出の個所である。“以て死す”については、狗奴国との関係悪化という緊迫した状況下で老死したという程度の解釈でいいのではないかと思う。

“大いに冢を作る”は大きな古墳の築造を指していると云われるが、築造そのものが盛大に行われたという意味にもとれるのではないだろうか…

“径百数歩”は、墓の形状/規模を示している。形状としては円墳/方墳が考えられるが、方形張出しの弱い円墳、例えば纏向型前方後円墳もまた有りうる。規模については、短里説から約30m径相当が主張されることもあるが、特定は難しく、尺貫法による約150m径相当も有りうる。個人的には、“平均歩幅 x 歩数”(約60～



70m)もまた有りではないかと思う。大まかに言えば、卑弥呼の時代、近畿では30m径の墳丘はむしろ小型の部類であったことを考えれば、倭人伝の記述は短里法にマッチしていないような気がする。約60～70mないし約150m有余の径を持った纏向型前方後円墳も含めた円墳ないし方墳が候補になると思う。

“殉葬する者、奴婢百余人”は、いわゆる“人垣”を指しているのではないかと思われる。古事記では、“崇神の子の倭日子命のとき初めて陵に人垣を立てる”とあるが、考古学的には崇神期は3世紀末～4世紀初頭ごろと考えられているので、卑弥呼没年(248年)当時、人垣が行われていた事実とマッチしていない。この場合、邪馬台国九州説の方が有利であるが、倭人伝の中に風聞が含まれる可能性があるので可否は判断できない。

旧来から⑩の記述は日本書紀の百襲姫没時の記述と似ていると云われる。すなわち突拍子もない形で急死し、民衆によって盛大に葬られている(→大いに冢を作る)。フォークロア的で、倭人伝の緊迫感はないが、おそらく狗奴国との抗争の場となった中部九州とは遠く離れた大和盆地で起きた出来事であれば、日本書紀の記述に不自然さはない。しかし日本書紀では、民衆が奉仕のように石を運んで古墳作りに参加したことになっていて百襲姫が民衆に近かったような印象があるが、卑弥呼が人前に出ることなく神仕えしていることとはマッチしていない。“卑弥呼＝百襲姫”説の成立には疑問が残る。

#### ⑪ 更に男王を立てるも国中服せず、更に相誅殺し、当時千余人を殺す。

⑪について。ここでは卑弥呼というカリスマの死後の混乱を記述している。記紀の記述ではこれに直結する事例は見当たらないが、しばしばヤマト王権の内部で骨肉の争いを思わせる内乱が起きている。例えば、崇神期の武埴安彦の乱、垂仁期の狭穗彦王の乱が然り。恐らく聖王・卑弥呼が死没して、神武期の聖俗一体の原初的な王権に戻る過程で、俗王サイドに骨肉の争いのようなものが起きたのではないかと思う。卑弥呼の死没は250年頃で、おそらく孝霊－孝元－開化期に引き当てられる。記紀では順当に父子相続になっているが、実際は複雑だったと思う。従前の近畿説では、卑弥呼－台与の王権を畿内の有力首長による共立王権として捉えているようであるが、畿内における瓊瓊杵系王権が征服によって成立したものとすれば、共立による調和に先行する、権力の奪い合いの場として初期王権を見ることもできると思う。

#### ⑫ また卑弥呼の宗女壱与(→台与)年十三なるを立てて王となし、国中遂に定まる。

⑫について。台与の登場を記述している。台与の登場には卑弥呼共立と同じような背景があると思われる。記紀の記述ではこれにつながる争乱の事例は見当たらない。崇神紀の豊鍬入姫に比定されることがあるが、崇神期を3世紀末から4世紀初頭とすれば、年代的にズレが大きいと思う。倭人伝では卑弥呼の縁者の娘となっているが、長生きした卑弥呼には近い縁者が少なく、瓊瓊杵系の姫みこである台与が選ばれたのではないか… 個人的には、台与は孝霊天皇の皇女・倭トト日百襲姫ではなかったかと思う。卑弥呼の再来としての台与は神託を行うとともに倭国王をつとめたと思う。

#### ⑬ 政等、檄(→激励)を以て壱与を告諭す。壱与、倭の太夫率善中郎将・掖邪狗等二十人を遣わし、政等の還るを送らしむ。因って台(→洛陽官庁)に詣り、男女生口三十人を献上し白珠五千孔……を貢す。

⑬について。ここでは台与の朝貢外交を記述している。台与の朝貢については議論もあるが、通説通り、晋書にいう266年の記事がマッチしていると思う。“倭の太夫”は伊都国にあった一大率の実務者(役人)ではなかったかと思われる。重要なのは長年、倭国を担当してきた張政たちがミッションを終えて帰国していることである。恐らく張政は帯方郡と北部九州を往来して朝貢関連の業務や軍事顧問的な役割に携わっていた

と思われるが、最終帰国に際して、檄を飛ばしている。これは、まだ対立が続いていた狗奴国あるいは台頭してきた弁韓・辰韓との関係に係わるもので、その対応を遠く纏向の地にいた卑弥呼に檄文の形で助言したものである。張政の帰国は、北部九州における情勢の好転を意味しているのだろう。

記紀にはこれを思わせる対外的な記事はみあたらないが、わずかに崇神紀に蘇那曷叱知の渡来が記述されている。纏向には珍しい渡来者の記憶であるが、それは北部九州にいて遂に大和盆地に現れなかった渡来者の投影ではなかったかと思う。

### 3. 卑弥呼と台与、および邪馬台国とその時代に関する考察

前節では、倭人伝後半の関連記述についてその背景を憶測してきたが、ここでは更にその憶測を展開して、卑弥呼と台与、そして邪馬台国とその時代の実体について考察してみたい。

まず**卑弥呼の実体**について。卑弥呼は共立によって倭国王になったとされるが、その時期は倭国乱末期で前節の①で述べたように、AD195年頃だったと思われる。仮に成人(15歳)に達していたとすれば、その没年(～AD248年)には68歳以上であったことになり、倭人伝の“年已に長大”に見合うので、この推定は十分成立すると思う。共立の背景には、前節②でも述べたように神武天皇没後の皇位継承のもつれにあると思われる。綏靖期以降、瓊瓊杵系の末子相続の原則が崩れたようだ。共立者は王権内の関係者(継承資格者とその周辺)だったと考えられる。従前の近畿説で云われるような、広域の首長連合による共立の可能性は低いと思う。

ともあれ卑弥呼は、共立によって聖俗2重王制の聖王となり、憑依によって神託を受け俗王位の継承者を指名したと思われる。おそらく公正を期して兄弟間や叔父-甥間のような継承を誘導したようで、綏靖以降、安寧-懿徳-孝昭-孝安-孝霊と5代にわたり、瓊瓊杵系王権が穏便に維持されたと推測される。

このように、卑弥呼が王位(皇統)の指名者として存続できたのは、卑弥呼の出自が瓊瓊杵系の本家である忍穂耳系の直系であったからではないだろうか？ 卑弥呼が生まれたのは、おそらくAD170～180年ごろと想定されるから、その出生地は北部九州の沿岸諸国(伊都国や奴国辺り)で、首長達に奉斎されて神武東征に加わり、畿内に移動したと考えられる。大和盆地に北部九州と同じ地名が散在するのは、かつて忍穂耳系の人々が北部九州から大和盆地に移動したことを暗示しているような気がする。

図らずも、聖王になった卑弥呼は、瓊瓊杵系の俗王位を差配したので、当然、王権内で優位に立ち、東遷によって出現した邪馬台国/邪馬台国連合(後述)の国王の地位に就いた。卑弥呼は、纏向に神殿を構え神祀りと有事の神託に専従し、**継承問題以外は俗王権に係わることはなく**、聖王の地位は安定していたようだ。

卑弥呼はその晩年、帯方郡を介し魏に朝貢しているが、それは邪馬台国本国が北部九州に置いた“代行者”である“一大率”が主導したもので、おそらく一大率は、倭国王・卑弥呼の名義を使って帯方郡に接近するとともに、当時激化していた狗奴国との抗争に対して救援を要請したと思われる。卑弥呼はその経緯を詳しく知ることはなく、やがて纏向の地で老死したと考えられる。

なお、**卑弥呼は倭トト日百襲姫ではない**と思う。日本書紀では百襲姫は崇神期まで生きているが、崇神期は3世紀末から4世紀初頭と見るのが妥当と思われるので、百襲姫はAD248年に亡くなった卑弥呼ではありえない。ただ、[考察Ⅰ](#)の補足S17で述べたように、百襲姫の説話は、意識的に追加された民間伝承で、崇神



天皇が皇位継承する以前のものであった可能性が考えられるが、状況的に説話の年代が 250 年まで遡ることは考えにくい。また卑弥呼の墓は没後すぐに築造されたと思われるので、推定される箸墓の築造年代(3 世紀後半、AD270 年以降)とはズレがある。百襲姫が卑弥呼である確率は低く、**箸墓は卑弥呼の墓ではない**と思う。

更に**台与の実体**について。台与もまた卑弥呼と同じく、共立によって倭国王に就いている。卑弥呼の死でいったん神武期の聖俗一体の王権に戻った後、王位継承をめぐって骨肉の争い(例えば孝元-開化)があったのではないかと… 共立の時期は卑弥呼没年の 2~3 年後ぐらいで、共立者は卑弥呼の場合と同様に王権内の関係者ではなかったかと思われる。

倭人伝では台与は卑弥呼の宗族の出身になっているが、年代的に孝霊天皇の後と推測されるので、前にも述べた通り、孝霊の皇女の百襲姫である公算は強い。日本書紀では、百襲姫は専ら、崇神紀に登場するが、**考察 I**で議論したように崇神天皇の没年を 4 世紀前半の 310 年頃とすれば、百襲姫の活躍は、台与の活躍期と思われる AD250~275 年頃にはマッチしない。多分、台与即ち百襲姫の活躍期は、崇神期以前の孝元期から開化期であったと思われる。崇神紀に倭トト日百襲姫が行ったとされる予告行為(大物主託宣/埴安彦謀反)は、例えば豊鍬入姫などが行っていた神祀りを増幅させる形で崇神天皇の徳を補強した修辭に他ならないと思う。古事記には百襲姫の記事はない。恐らく**崇神紀の百襲姫は開化期の台与の印象を引用したもの**に他ならない。

倭人伝にはその後、台与がどうなったかは書かれていない。一大率の主導で晋への朝貢が行われ、張政達 が帯方郡に帰った後で、三輪山の 大物主信仰におぼれ、やがて不慮の事故で亡くなったと思われる。多分、卑弥呼にくらべ台与は民衆に近かったようで、その墓は神と人によって昼夜兼行でつくられたと云われる。

台与の死後、それほど後継争いもなく崇神期に移行したので、聖俗 2 重王制は自ずと解消して聖俗一体の王制に戻ったと考えられる。ともに聖俗一体の王であった神武天皇と崇神天皇は、何れも“御肇国天皇(ハツクニシラススメラミコト)”に祀り上げられたようだ。

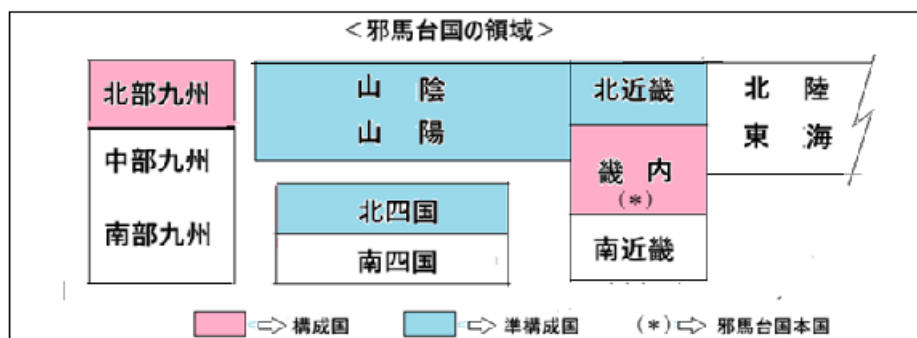
次に**邪馬台国の実態**について。奈良盆地が何故、大和盆地と呼ばれ大和国と呼ばれるようになったのか… 古来より様々な議論があるが、個人的には、2 世紀の末ごろ北部九州から持込まれた“外来語”ではなかったかと思う。**考察 I**でも述べたように、AD130 年頃、北部九州勢力はやや唐突な形で山陰方面/瀬戸内海方面/南部九州方面に“膨出”を開始し、東遷/東征の形で畿内に進出したと考えられる。その結果、もともと玄界灘沿岸にあった“ヤマト(山戸)”という小字が奈良盆地に持込まれ、やがて広域な地名として定着したと思われる。

何故、北部九州に膨出現象が起きたのか? 弥生社会における変化、すなわち気候変動などによる集住化→個人的/集団的な階層分化→首長制社会の形成という変化は、西日本では一般に見られる現象であるが、玄界灘沿岸部では、地形的な要因に朝鮮半島との交流による影響が加わって、早々に集団的な飽和に達し、外部に向かって溢れ出したと考えられる。その中で、中部九州から南部九州に向かった**瓊瓊杵系の流れ**は、志布志湾手前で南下を見切って U ターンし、**北九州・岡水門**で玄界灘沿岸諸国から押し出した**忍穂耳系の流れ**と合流(考察 I の S07 参照)した後、瀬戸内海を経由して畿内に進攻したと考えられる。いわゆる神武東征である。当時、畿内には先に東遷していた饒速日系の流れ(物部族)が大坂平野や大和盆地北部に根を張りつつあったので、衝突をさけつつ大和盆地の南部に進攻し、先住部族の抵抗を排除しながら大和盆地の過半を掌握したと思われる。

この結果、北部九州の 3 つの天孫族すなわち忍穂耳系/瓊瓊杵系/饒速日系がそろって畿内の中枢に集合し、



邪馬台国としてスタートしたと見られる。3世紀前半の時点で邪馬台国の領域をモデル化すると下図のようになる。邪馬台国は数十のクニ(首長国)の緩い集合体で、構成国と準構成国からなる。構成国は、畿内の“邪馬台国本国”と北部九州の“天孫族の故地”である。後者には魏志倭人伝に記述の玄界灘沿岸国が含まれる。



準構成国は半ば独立国で、他の準構成国や構成国と首長間交流や交易を通してつながっているが、利害が対立すると争うこともあった。例えば山陽の吉備国は邪馬台国本国から討伐されている。準構成国でやや特異なケースは山陰で、東遷や東征には加わっておらず“蚊帳の外”にいたが、天孫族の穂日系の流れに支配され、日本海交易で北部九州や畿内、更には北陸と濃い繋がりがああり、一大率との係わりも深かった。

邪馬台国本国における血統的な序列は、忍穂耳系＞瓊瓊杵系＞饒速日系であったが、土地所有と部族支配で瓊瓊杵系が最も優位に立った。彼らには、南部九州で勇猛な熊襲/土蜘蛛との豊富な戦闘経験があり、厄介な先住部族の統治経験を持っていたからである。饒速日系は土地所有や経済面で先行していたものの軍事面では劣り、早々と瓊瓊杵系のサポートに回った。忍穂耳系は遠く玄界灘沿岸に故地を所有し、交易・外交面で優位にあったが、軍事面や統治面では弱く、客人的な位置に留まったようだ。そのため、東征を絶えずリードした瓊瓊杵系の王である磐余彦(神武天皇)が、邪馬台国の聖俗一体の王(→倭国王)であったと推測される。

然るに、次の綏靖天皇の時代に入ると、王位継承の乱れから内乱状態になり、“相攻伐すること歴年”の末、忍穂耳の直系と思われる卑弥呼を立てて乱の収束に至ったと推測される。もともと巫女であった卑弥呼は憑依によって聖俗2重王制の聖王となり、終身にわたって瓊瓊杵系の俗王の継承問題を差配したとみられる。即ち邪馬台国は卑弥呼そのものであり、帯方郡や魏にとって卑弥呼はまさに倭国王であった。

非常に興味深いのは玄界灘沿岸国が終始、邪馬台国に従属し続けたことである。確かに、沿岸国の首長層にとって邪馬台国への服従は半島との交易利権の維持の上で必須であった。卑弥呼の晩年、沿岸国の首長層は帯方郡支配が魏に移行するタイミングをとらえて魏への朝貢を実行した。恐らくそれは卑弥呼にとって事後承諾に近いものだったと推測される。卑弥呼は現場(→沿岸国)に引きずられて魏に朝貢したが、朝貢実務には殆ど関与していないと思われる。そのため卑弥呼の居た大和盆地には異国の気配は薄く、当時の俗王権は全く朝貢の枠外にあったと見られる。朝貢実務は全て、伊都国と一大率の手で行われたと推測される。

前述の通り、邪馬台国本国が沿岸諸国の“検察”のために設けた一大率は邪馬台国本国の“検察官”というよりも“代行者”だったと思う。東遷によって沿岸国の中枢が大和盆地に移動した後もその跡地にとどまり、対外窓口として交易業務や外交交渉を継続していたと見られる。倭人伝には難升米をはじめ幾人かの幕僚めいた官人が登場するが、その多くは山陰も含めた沿岸諸国の首長層から出た一大率の構成員で、必ずしも邪馬台国本国からの派遣者ではなかったように思う。

その頃、邪馬台国出先の沿岸諸国の背後に狗奴国の影が迫っていた。それは九州島の筑後川以南にあって、邪馬台国本体を脅かすものではなかったが、玄界灘沿岸諸国にとっては交易上の利権を侵害するもので、絶対に排除すべき存在であった。帯方郡にとっても、狗奴国の北上は朝鮮半島縦通しの柵封体制を脅かすものであった。塞曹掾・張政らの派遣は、帯方郡にとって狗奴国の挑発が重要な政治課題であったことを示すものであるが、恐らく邪馬台国本体はそれを重大な危機として認識してはいなかったようだ。張政はそれを理解して伊都国の一大率に留まって督戦し、多分、一度も邪馬台国本国の纏向に来ることはなかったと思う。

おそらく狗奴国との対立の中で起きた卑弥呼の死は、辺境の緊張とは無縁の、単なる老死だった。卑弥呼は独身だったので、忍穂耳の直系は断絶、聖俗2重の王権は解消して瓊瓊杵系による聖俗一体の王権が復活した。然るに王位(皇位)継承の絡みで争いが起こり、神託を受けるために先代の孝霊天皇の皇女・倭トト日百襲姫が聖王として共立され、一大率は、この後継者を“卑弥呼の宗女”として帯方郡に報告したようだ。

台与(百襲姫)の時代になっても狗奴国の脅威は残り、張政らは、一大率の要請を受けて北部九州の支援を継続していたが、やがて狗奴国の脅威が緩和したため、晋への朝貢を機に帯方郡に帰還したと考えられる。因みに、朝鮮半島に渦巻く東アジアの胎動は、伊都国辺りでストップし、纏向に伝えられることはなかった。台与(百襲姫)はその後、三輪山の大神信仰に傾斜して不慮の死に至った。当時、瓊瓊杵系の俗王権は安定していたので、聖俗2重王制に戻る必要はなく、聖俗一体の崇神期に移行したと思われる。ただ、神祀については難航したようで、淳名城入姫や大神の説話はこれを物語っている。

なお崇神期への移行とともに、北部九州の立ち位置も自ずと変化し、一大率は独自の意志で外交権を行使することはもうなかった。AD314年、帯方郡は滅亡して朝鮮半島南部は三韓時代に入ったが、弁韓はこれに先行する形で崇神天皇以降の初期ヤマト王権に直接、接近してきた。蘇那曷叱知/都怒我阿羅斯等/天日槍の説話はこれを反映している。当時の一大率は、形式上の外交窓口として機能するとともに、まだ半島交易の実務を掌握していたと推測される。因みに古事記の神武天皇の項にでてくる“筑紫の三家連”は一大率の官人の後身ではないだろうか…

更に欠史八代の実態について。[考察Ⅰ](#)では記紀の欠史八代における天皇の事歴の欠如を、飛鳥時代末期の乙巳の変によって天皇記/国記が焼失したことで派生したと見ているが、邪馬台国九州説の論点からくるもので確固とした主張ではない。本考察では、記紀の欠史八代における天皇事歴の欠如が、聖俗2重王権に由来していると考えたい。実に、記紀における欠史八代の記述は邪馬台国の俗王権の流れをフォローしたものに他ならず、瓊瓊杵系の俗王権を強調するためか、聖俗2重王制は故意に隠ぺいされていると思う。

卑弥呼は前述したとおり、俗王権の継承を差配したため、俗王である瓊瓊杵系の王位は、むしろ安定していたと思われる。特に物部族が瓊瓊杵系の王権の下に就くことで、大和盆地に争乱が起きることはなくなり天皇家は婚姻を通じて、先住の三輪系/葛城系の部族に結びつくとともに、北近畿や東海地方と首長間交流の形で繋がっていたと考えられる。ところが孝霊期辺りから周辺に軍事力を行使する傾向が現われ、例えば吉備津彦は大阪湾沿いに進軍して吉備国を征圧している。この変化は大和盆地において土地所有などで社会構造が飽和してきたことを意味するのかもしれない。吉備の征圧の効果は古墳文化に反映され、纏向型前方後円墳の築造や特殊器台などによる祭祀などがメジャーになったのは周知の通り。その場合、孝霊期がいつだったかは気になる。[考察Ⅰ](#)でも議論したように崇神期をAD280～310年頃とすれば、孝元-開化期はAD250～280年頃になり、孝霊期は250年頃まで続き、孝霊天皇と卑弥呼は同じ頃に死没したことになる。3世紀半ば



を画期として古墳時代が始まり、やがて古墳が大規模化していったことにはまず異論はない。

個人的には、台与の項で述べたように、孝元-開化期に王位継承に絡む争乱が起きたのではないかと考えている。孝元の妃の伊香色謎命が開化の後になっておりやや違和感がある。争乱がどのようなものだったかは想像の域をでないが、前述のように台与(=百襲姫)の共立の動機になったのは確かだと思う。

#### 4. 考古資料による邪馬台国の考察

以上、一般通念と文献資料に基づいて憶測を重ねてきた。ここでは考古資料の観点からその憶測の可否を検討してみたい。

まず纏向遺跡について。纏向が邪馬台国の中心であったことは、**辻地区の大型建物、大溝などの水路遺構**、あるいは**前期古墳の集中**などから推測できる。特に辻地区の大型建物群は卑弥呼/台与の宮殿や神殿であった可能性がある。出土した桃の種や弧文板は祭祀につかわれたのだろう。

大溝などの水路遺構は最寄りの唐古・鍵の影響があると思われるが、個人的には2世紀末、奴国の比恵・那珂から伝えられた技法ではないかと思う。即ち、神武東征に乗じて北部九州から東遷した忍穂耳系が纏向地区に住みつき大溝を掘ったのでないか…

また纏向には前期古墳が多い。例えば石塚/ホケノ山/勝山/矢崎/東田大塚…など。個人的には、これらは3世紀から4世紀にかけて築造された**忍穂耳系の首長の墳墓で、その中に卑弥呼の墓も含まれるのではないか**と思っている。古墳の規模が50～70m径と揃っており、2.項の⑩で述べた平均歩幅ベースの60～70m径に接近するので、可能性は十分あると思う。

土器について。纏向遺跡から出土する土器の約2割が、各地方から持ち込まれた搬入土器であることはよく知られているが、北部九州の土器や韓式土器の割合は著しく少ないと云う。これは一見、畿内と北部九州の交流の欠如を想起させるが、相互の交流を考えれば、決して疎遠であったわけではないと思う。北部九州から畿内に流れる交易品は威信材や金属素材等が大半であったため土器で送られることは少なく、また遠距離であったため交易の形態が“中継貿易”になって、北部九州の土器が畿内に流入することはごく稀ではなかったかと思われる。また畿内で発祥した庄内土器が北部九州でも作られている所から、むしろ北部九州製の庄内式土器が纏向に逆流していて、北部九州産として出土品がカウントされていない可能性もあると思う。

一般的に云えば、当時の北部九州と畿内は、**日本海ルートや瀬戸内海ルート**を介したネットワークによって十分つながっていたと考えるのが自然である。因みに纏向型前方後円墳も北部九州に多々存在し、纏向に多い2重口縁壺も出土している。首長間交流もそれなりにあったのではないか…

銅器について。ここでは代表的な銅器として銅鏡と銅鐸をあげて議論してみたい。銅鏡の副葬儀礼は当初、北部九州を中心に拡がり、やがて近畿に中心を移していったのは周知の通り。またこの移行とともに後漢鏡時代から模倣鏡/倭鏡の時代に変化している。威信材として銅鏡をみれば、それは北部九州から日本海ルートを通して近畿中央に流れたと思われる。

卑弥呼に下賜された銅鏡100枚は、伊都国の一大率でチェックされたあと、魏の皇帝のコメントに従って準構成国の首長たちにその一部を配布しながら、大和盆地の邪馬台国本国に送られたと考えられる。その痕跡



は、卑弥呼入貢の AD239 年の紀年銘を持つ鏡が、島根県・神原神社古墳に伝世していることから窺われる。類似の紀年銘鏡は他にも出土している。その多くは仿製鏡の疑いがあり確実さは欠けるが、山陰から北近畿さらには摂津方面に流れた気配がある。近畿における銅鏡の数は北部九州を上回っているが、卑弥呼の鏡をきっかけに畿内における国産鏡の製作が盛んになったようだ。

銅鐸による農業共同体の祭祀は、弥生後期に入って北部九州で衰退し、近畿/東海で保持されていたものの、北部九州の天孫族の膨出、特に物部族東遷及び神武東征に由る征服王朝的な抑圧によって衰微していったと見られる。更に憶測すれば、卑弥呼-台与による神裁的な統治傾向もまた、その衰微に寄与しているのではないだろうか…

**鉄器について。**弥生後期後半、北部九州では鉄器の普及が著しかったが、生産力では北部九州をはるかに上回る近畿では、何故かその普及は進まなかった。いわゆる“見えざる鉄器”問題である。これについては [考察 I](#) の補足 S13 でその背景を論じ、近畿における鉄器の普及の遅れを地域の社会的な要因によるものとしたが、筆者が主張する邪馬台国近畿説からは、更にもう一つの背景が考えられる。

それは、交易の有り様である。従前の近畿説によれば、倭国乱によって北部九州は近畿及び瀬戸内勢力に屈して、勝者である畿内・邪馬台国は、原の辻交易による鉄器/鉄素材を自由に入手できたことになる。一方筆者の近畿説によれば、確かに沿岸諸国の忍穂耳系・天孫族の上層部分は、畿内の邪馬台国本国に移動したものの、天孫族の基幹部分はそのまま残留して、従来のネットワークによる[原の辻+日本海]交易に従事し、交易の利権が邪馬台国本国に差配されることはなかったと推測する。

**大型前期古墳について。**奈良盆地には、3 世紀後半から 4 世紀後半にかけて長さ 200m を越える大型の前方後円墳が幾つか築造されている。このうち行燈山古墳/宝来山古墳/渋谷向山古墳/佐紀石塚山古墳については、通念的に 4 世紀の崇神/垂仁/景行/成務の各天皇陵に振り当てられている。これらに先行すると云われる 4 つの大型古墳については議論が多く、殆ど不明であるが、個人的には以下のように憶測している。

- ・箸墓古墳(大市墓)：倭トト日百襲姫 / AD270～280 年代
- ・西殿塚古墳：開化天皇 / AD280～290 年代
- ・外山茶臼山古墳：大彦命(安倍臣らの祖) / 290～300 年代
- ・メスリ山古墳：武渟川別(大彦命の子) / 310～320 年代

箸墓古墳に関してはこれまで述べてきた通り、おそらく倭トト日百襲姫の墓に見合っている。開化天皇の陵墓は記紀に治定されているが、現実には合致していない。箸墓古墳に次いで築造されたとすれば、西殿塚古墳が開化天皇陵に最も見合っていると思われる。外山茶臼山古墳については、ほかの古墳のような埴輪が見られず、多数の破鏡された銅鏡や鉄製品が出土して特異性があり、天皇陵と云うより有力首長墓といった気配が強い。メスリ山古墳も茶臼山古墳に似ている。いずれも安倍臣につながる古墳ではないかと思う。

なお百襲姫(台与)以前の王墓は小規模である。以後の墳墓が大規模化したのは、[考察 I](#) の補足 S18 で述べた通り、吉備国の征圧によって王権が拡大し、吉備地方の古墳様式が導入されたからである。これは大和盆地の大型前期古墳を議論する場合の前提となる。

